OSSプロジェクトのIssueの内容分析によるオンボーディング支援

8/25

発表者：大森伊月

背景

- OSSではプロジェクトを存続していくために常に開発者を求めている[1]
- OSSプロジェクトへの参加には様々な障壁があり，新規開発者のオンボーディングが必要
- オンボーディングはコミットやバグ報告を通じて行われ，それらにはIssueが用いられている

[1]Shaosong Ou Alexander Hars. 2002. Working for free? Motivations for partici- pating in open-source projects. International journal of electronic commerce 6, 3 (2002), 25–39.

目的・アプローチ

目的

- OSSプロジェクトのオンボーディングに有効なIssueの内容を理解する

アプローチ

- オンボーディング済みの開発者がどのようなIssueを解決したかを分析することでオンボーディングに有効なIssueの内容を理解する

オンボーディング済み開発者の設定

複数のケースを設定し，検討する

- Case1
  - コミット数がn回以上をオンボーディング成功者とする
  - 先行研究で見かけた
- Case2
  - 一定期間以上コミットを含むアクテビティがある開発者をオンボーディング成功者とする
- Case3
  - 一定期間以上コミットを含まないアクテビティがある開発者をオンボーディング成功者とする

オンボーディングの定義について

Onion model[2]ではOSSプロジェクトへの基礎的な貢献はバグ報告者を含める

よって，コミットだけでなくバグ報告を含む全てのアクティビティで一定期間以上活動している人をオンボーディング済みと定義する

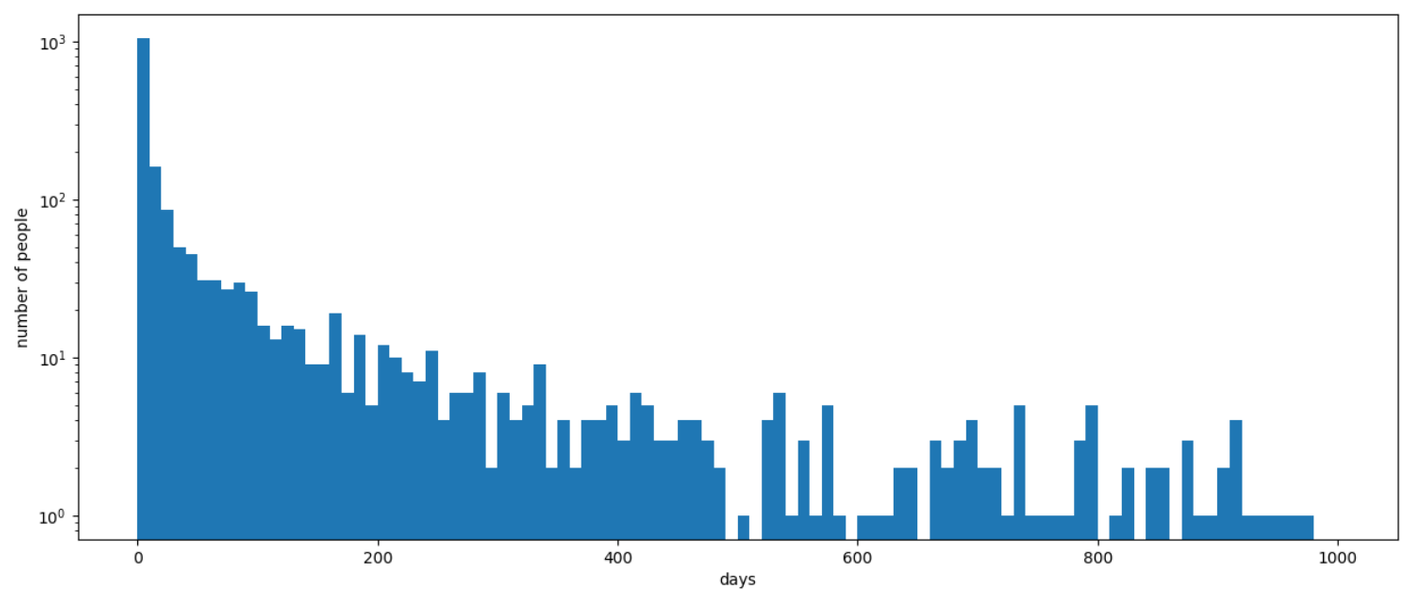

図1 活動期間とその人数の関係(縦軸:人数, 横軸:活動期間)

[2]Amrit, Chintan & Hillegersberg, Jos. (2010). Exploring the Impact of Socio-Technical Core-Periphery Structures in Open Source Software Development. Journal of Information Technology. 25. 216-229. 10.1057/jit.2010.7.

今後の予定

- 効果の定量的な測定方法の検討
- Issueの内容の分析方法の検討